

[国 語]

## 聴覚法を取り入れた覚え歌による漢字指導の工夫

－より多くの児童が楽しく学習する姿を目指して－

高橋 月\*

### 1 問題の所在

小学校学習指導要領解説国語編(2018)では、漢字の指導については、書きの指導は2年間をかけて確実に使えるようにすることが求められている<sup>1)</sup>。しかし、学習指導要領では2年生は、1年生の2倍の160字の漢字が配当され、急激に漢字の量が増えている。筆者が現在担任している学級には、書字が苦手な児童、作業に時間がかかる児童、他の児童と同程度の練習をしても正しく漢字を覚えられない児童など様々な特性がある児童が共に学習をしており、学年の配当の漢字を確実に書くことが困難な状況も見られる。文部科学省による通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な支援を必要とする児童生徒に関する調査<sup>2)</sup>によると学習面で著しい困難を示す児童生徒の割合は、4.5%と推定されており、通常学級における特別な支援の必要性が漢字学習においても重要となっている。

総合初等教育研究所の教育漢字の読み書き習得に関する調査と研究(2003)によると学年が上がるにつれて漢字の読み書きの正答率は低くなっていると報告されており<sup>3)</sup>、その原因として、漢字が複雑なものが多くなっていくこと、学年が進むにつれて覚える漢字が増えるのに、国語の標準授業時数は減少し自主学习で児童に任せていること、また学習意欲にも大きな要因があるのではないかと考える。

これまで筆者は、毎回、漢字の指導をする際に読みや書き順などを教えた後、機械的に模写をさせるいわゆるドリル学習をすべての児童に指導していた。しかし、同じように指導しても学習内容の定着には大きな個人差が生まれていることを感じていた。また、学年漢字テストでは、合格できなかった児童には、合格するまで再テストを実施していた。このような指導法は、特別な支援を要する児童や漢字の習得に対して苦手意識のある児童の漢字学習に対する意欲を低下させ、漢字嫌いを生み出しているのではないかと思うようになった。

筆者は、昨年度、特別支援学級の担任をしており、漢字の書きに困難があるA児に合った指導法を探していく中で春原則子ら(2005)の聴覚法に出会った<sup>4)</sup>。A児は、聴覚優位であったことから聴覚法を用いた漢字の書字学習を行う中で書ける漢字が増え、自信をもって楽しみながら学習し、学習意欲の向上にもつながった。そこで、この特別支援学級で行った実践を通常学級にも取り入れれば、様々な特性のある児童が、無理なく楽しく漢字を習得し、漢字の学習が好きになると考えた。

### 2 研究の目的

漢字学習指導において、大西愛(2020)は、児童が習熟しにくい漢字の指導には、「大きく、ゆっくり漢字を書く時間の確保が大切である」と述べており<sup>5)</sup>、指導の工夫が漢字の習得に効果があることを明らかにしている。また、栗林育雄(2009)は、漢字学習が好きでない要因の一つが、ひたすら回数をこなす書き取り練習であるとし、練習プリントの工夫や漢字クイズの活用等を用いることにより、児童の漢字学習の意欲を高める工夫を行っている<sup>6)</sup>。低学年の漢字は、象形文字や形声文字で構成された漢字が多く、視覚的要素が強いため二人の指導法は特に有効な反面、聴覚優位な児童にとっては、漢字の習得に難しさを感じる可能性もある。

特別支援学級における障害のある児童に対しての聴覚法の実践は、大櫃達也(2018)が、漢字書字障害のある生徒にたいして実践しているが<sup>7)</sup>、管見のところ通常学級での実践は行われていない。そこで、本研究では、特別支援学級で実践した聴覚法の漢字学習指導を改善し、「漢字覚え歌」として通常学級において援用することにより、聴覚優位な児童だけでなく多くの児童が、達成感をもちながら、無理なく楽しく漢字を習得できることを実践を通して明らかにすることとした。

\* 柏崎市立比角小学校

### 3 研究構想と検証方法

表1 特別支援学級A児が作った覚え歌の例

漢字	覚え歌
知	ノ(の)→ニ(に)→人(ひと)→口(くち)
学	ツ(つ)→ワ(わ)→子(こ)
足	口(くち)→ト(と)→人(ひと)
空	ウ(う)→ル(る)→エ(え)
入	ひとかがみ
虫	中(ちゅう)→とんかち
目	たな
色	ク(く)→まど→はね
羊	羊(ひつじ)ひくーの羶(はか)
雨	スイッチ→てんてんてん
数	米(こめ)→女(おんな)→のさん
花	くさかんむり→イ(い)→ヒ(ひ)
又	なべ→X(エックス)

ている。道村の実践は既習の漢字がある程度あり、部首を知っていないと実践することが難しいと考えられた。低学年は既習漢字が少なく、それ以上分解すると線構成になってしまうような漢字も多くあり、漢字をパーツに分けることが難しい。そこで、既習の漢字が少なかったり、これ以上パーツに分けられない漢字であったりした場合でも練習できるようにするために、カタカナや知っている漢字に分解できない部分があった場合は身の周りの物でその部分に似ている形はないか探し、それでも見つからない場合は、「たて」「よこ」という言葉を使って覚え歌を作るようにする。

#### ② 児童自身による漢字覚え歌作りと学級での共有化

特別支援学級での覚え歌による漢字指導の実践では、教師が「漢字覚え歌」を作り、提示するよりも、児童自身が「漢字覚え歌」を作る方が、楽しく意欲的に活動していた。そこで、本実践でも筆者が考えた覚え歌を児童が覚えるのではなく、児童自身が覚え歌を作る活動とし、漢字学習への意欲の向上を図ることにした。その際に扱う漢字は、2学年で新しく学習する「魚」や「姉」などの象形文字や形成文字を中心とする。児童の抵抗をなくすために児童本人が覚えやすい字形を見つけ、覚えやすい音読み訓読みを選択して覚え歌を作るように自由度をもたせた。形を覚えることを優先とするため、意味と関連づけるようには指示をしない。「形・音・義」の漢字の三要素のうち「形」「音」に焦点を当てることで2年生の児童が意欲的に漢字を習得すると考える。また、通常学級の大人数で学習する良さを活かせるように友達と考えた覚え歌を共有し、みんなで楽しみながら学習できるように改善を図る。

#### (2) 検証方法

①児童の発話やシート等の記録を基に構想した聴覚法をどのように取り入れながら漢字に関心を持ち、取得していくのか考察する。

②テストの結果を漢字覚え歌の創作の有・無の観点で集計・処理し、その有効性について分析考察する。また、アンケート結果や内観法から児童の関心意欲の変容を分析考察する。

### 4 実践の内容

(1) 実施対象 N県K市立H小学校2年生27名対象

(2) 実施期間 令和2年7月1日～8月5日までの期間に合計4回実施

(3) 指導の構想

本研究では、国語科の学習の時間の冒頭15分間を用いて、覚え歌による漢字学習を行う。児童は、長時間、繰り返しの漢字練習を行うと、学習意欲がかえって低下してしまう。そこで、15分間程度の短時間の指導を長期間にわたり、繰り返し行うこととする。そのことにより、楽しみながら漢字の習得ができるように構想した。

(4) 覚え歌による漢字指導計画 全4回

時間	○指導内容	・指導上の留意事項
1	○基本部首を覚えよう。	・児童が部首に興味をもてるように楽しみながら覚える活動を取り入れる。
2	○覚え歌の作り方を知ろう。	・はじめに覚え歌とは何か例を示しながら全体で漢字をパーツに分ける練習を行う。
3	○新出漢字の覚え歌を考えよう。①	・全体で共通の覚え歌を考え、練習する。
4	○新出漢字の覚え方を考えよう。②	・個人で覚え歌を考えてから全体で共有する。

## (5) 指導の実際と考察

### ① 部首をゲーム感覚で覚える（1～2時間）

昨年度の実践では、覚えている部首数が少ないと、歌を作る際に覚え歌が作りづらいことが明らかになっていた。そこで、今年度は、少しでも漢字の分解の要素や語彙を増やすために部首を覚える活動を取り入れるようにした。小学生の漢字でよく出てくる基本的な部首をカードに書いておき、部首を見て部首の名前を答える練習を行った。機械的にカードを見て部首名を答えるだけでなく、ミッシングゲーム<sup>10)</sup>をしたり、クイズ形式で練習したりと児童が部首に興味をもって楽しみながら覚えられるように工夫した。また、部首名を覚えるだけでなくそれぞれの部首がどの漢字に使われているか調べるようにした。筆者がある部首の説明をすると、児童は「他の漢字にも使われているよ」という発言が見られた。また、家庭学習で同じ部首をもつ漢字を調べてくる児童も現れるなど部首に関心をもち始めた。

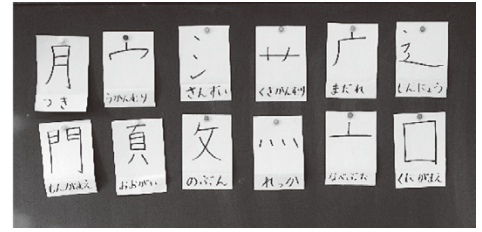


写真1 部首カード

### ② 漢字をパーツに分けた「漢字覚え歌」作り（2～4時間目）

覚え歌による漢字指導の2～4時間目に行った。漢字の中から既習の漢字やカタカナ、身の回りの物の形に似ているものを探るように声かけをし、構成要素に分解して覚え歌作りを行った。さらに漢字の分解要素や語彙を増やすために、パーツを身の回りの物に例えるように声かけを行った。特別支援学級のA児に実践したときは、覚え歌を作るとき身の回りの物に例えようとする様子が多く見られたが通常学級ではカタカナや漢字、部首の組み合わせだけで身の回りのものに例えようとする児童は見られなかった。作った覚え歌は何回か声に出して言う練習を行うようにした。授業が早く終わって時間があるときなどにも作った覚え歌を言う練習を行うようにした。その結果通常学級のB児は、「朝」と言う漢字で「十（じゅう）→早（はや）→月（つき）」という覚え歌を作った。

このように、1時間目に部首名に関心を持ちながら覚える活動を行っていたことにより、部首名を取り入れて漢字の構成を捉えながら覚え歌を作る様子が見られた。児童たちは、「もっとつくりたい」と楽しみながら漢字覚え歌作りに取り組んでいた。

### ③ 漢字覚え歌の共有化（3～4時間目）

漢字覚え歌による漢字指導の3時間目には、クラスで意見を出し合いながら漢字覚え歌作りを行った。その際、漢字の構成要素を歌にしやすい象形文字や形成文字の漢字を中心に学習材とした。最初は、漢字を見て覚え歌を思いついた人が意見を出し、クラスで共有した。その中で児童の多くが納得したものや児童同士の意見を組み合わせで作ったものをクラスの覚え歌とし、全員で同じ覚え歌を唱えるという方法で学習をしていた。しかし、全員が同じ覚え歌で覚えようとする「他の覚え歌の方が覚えやすい」という納得できない児童の様子も見られた。そこで、4時間目からは、個人に合った覚え歌で練習できるような学習方法に改良した。まず、新出漢字を見て個人で覚え歌を考え、ワークシートに記入する。次にそれぞれの漢字覚え歌を発表し、みんなで出てきた覚え歌を唱える。その後、友達のを聞いて自分が一番覚えやすい覚え歌を選んだり、よりよい覚え歌になるように改良したりして自分の覚え歌を決めて練習するように改善した。覚え歌を考えられなかったり、友達の意見を聞いても選べなかったりする児童には教師がおすすめの覚え歌を示し練習させるようにした。こうすることで個人がそれぞれに合った覚え歌で練習することができるようになったと考える。個人で漢字覚え歌を考えさせたことで表2のような様々な覚え歌の案が出て、児童は友達の多様な考えに触れることができた。表2の「朝」の漢字覚え歌ではB児、C児、D児共に既習の漢字に分解して覚え歌を作っている。しかし、C児とD児では同じ漢字に分解しているが読み方は違っている。また、B児のみ「月」を部首名として捉えて組み込んでいる。友達の意見を聞いて、「その歌いいね」「覚えやすいね」など友達の考えを認めたり、自分の歌に取り入れたりする様子が見られた。学級全体で楽しく覚え歌を共有することができた。

☆おぼえうたをつくらう！			
家	毎	彦	朝
う ↓ し の し ず ↓ と ん と ん し ず い	海 の み ぞ	あ さ し も つ き お ひ い	十 ↓ 日 ↓ 十 ↓ 月

図1 D児が作成した漢字覚え歌

表2 児童作成の漢字覚え歌の例

B児作成：朝⇒十（じゅう）→早（はや）→月（つき）
C児作成：朝⇒十（じゅう）→日（にち）→十（じゅう）→月（げつ）
D児作成：朝⇒十（じゅう）→日（にち）→十（じゅう）→月（がつ）

## 5 研究の結果と分析

### (1) テスト結果による漢字の正答率の変化

漢字の5問テスト（漢字ミニテスト）を5回実施し、履修漢字の正答率の変化から量的な変化を検証した。テストは、直前に学習した漢字を中心に出题し、漢字覚え歌を作った漢字と作らなかった漢字の正答率を比較について検証した。

1回目のテストでは、覚え歌を作っていない漢字をテストした。2回目と3回目は覚え歌を作った漢字を中心にテストした。その結果、1回目と比較し正解の平均点は2回目、3回目の覚え歌を作った漢字のテストの方が高い結果となった。4回目、5回目のテストは、同じ漢字を出題した。4回目のテストは覚え歌を作る前に実施し、5回目は覚え歌を作った後に実施した。なお、4回目と5回目のテストの間には覚え歌以外の漢字練習は、練習はさせていない。

結果は、表3のようになり、1回目から3回目までの結果から、覚え歌で漢字学習を行った方が、漢字の習得率が高いことが分かった。また、4回目と5回目を比較すると同じ漢字でも覚え歌を作った後の方が正答率が上がった。このことから漢字の複雑さに関係なく覚え歌で漢字学習を行った方が漢字の習得率が高くなることが分かった。

また、無回答率も覚え歌で学習した漢字の方が低くなった。無回答以外の誤答の漢字を見ると、パーツの一部だけは正しく書けるようになっている児童も多く見られた。答え合わせの際に筆者が漢字覚え歌を口ずさむと漢字を思い出して書くことができた児童の様子も見られた。

表3 ミニ漢字テストの結果（全体27人）

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
出題漢字	前, 教, 光, 考, 魚	百, 後, 組, 丸, 魚	教, 姉, 買, 点, 友	朝, 毎, 家, 雲, 顔	
覚え歌	なし	あり	あり	なし	あり
平均点	4.04	4.88	4.65	3.1	4.58
無回答率	32%	14%	4%	50%	7%

### (2) 児童アンケートの結果より

アンケートは2回行った。1回目は、夏休み前の最後の指導を終えた直後に行った。2回目は夏休み明け最初の国語の時間に行った。1回目のアンケートでは、覚え歌を使った漢字の練習方法について児童たちはどのように感じているのか調べることを目的とし、2回目のアンケートでは、夏休み明けどれくらい覚え歌を覚えているか聞き、覚え歌は長期記憶にも効果があるのかを調べることを目的とした。

1回目のアンケート結果は、表4のとおりである。漢字の学習は、多くの児童が好きと回答しているが嫌いと感じている児童も少人数ではあるがいることが分かった。また、漢字覚え歌の学習を楽しくないと答えた児童はいなかったが、いつもの漢字の学習より楽しいと答える児童は、49%で約半数だった。なお、覚え歌で漢字は覚えやすくなったかと質問では、約6割の児童が覚えやすくなったと回答した一方で覚えにくくなったと回答した児童も約1割いた。

表4 令和2年8月5日 実施

○質問項目	好き	普通	嫌い
質問項目1 漢字の勉強は好きですか。	52%	33%	2%
○質問項目2	楽しい	変わらない	楽しくない
覚え歌の漢字の勉強方法は、いつもの漢字の勉強より楽しいですか。	49%	51%	0%
○質問項目3	覚えやすい	今までと同じ	覚えにくい
覚え歌で漢字は覚えやすくなりましたか。	59%	30%	11%

夏休み明けに行った2回目のアンケート結果（2年8月25日実施）では、児童に「漢字覚え歌」の学習を覚えていますかと質問した結果、96%の児童が覚えていると回答した。覚え歌を作った漢字で覚えている漢字を書くように促すと1人が平均して4.8文字の漢字を書いていた。そこで、筆者が「考・後・組・丸・点・買・雲・公・顔・朝・毎・家」の12の漢字覚え歌を歌い、それを聞いて思い出した漢字を書くように促した。そして児童が書けた漢字を集計した。その結果、学級平均で1人9.1文字の漢字を書けた。9.1文字は、12の漢字中75%の回答率にあたり、漢字を履修してから54日間がたっているにもかかわらず、良好な回答率となった。

### (3) 児童の内観報告より

第4回目の学習の終了後に、覚え歌による漢字学習について児童に感想を求めた。児童の感想を肯定的、否定的に分類したものが表5である。児童の感想には、「楽しかった」「覚えやすくなった」などの肯定的評価が80%、「難しかった」「分からなかった」などの否定的評価が20%であった。肯定的評価の中には、みんなで覚え歌を考える楽しさを感じている児童や漢字で歌作りができることを初めて知って面白さを感じている児童もいた。

特に漢字の学習を苦手としている児童の得点に大きな変化が見られた。漢字の形を覚えることが苦手な児童Cは、4回目は、1問も正しく書くことができなかつたが、覚え歌を作ると5回目のテストでは4問正しく書けるようになっていた。そこで、C児に覚え歌による漢字練習について感想を求めたところ、次のように答えた。「覚え歌を考えるとところは難しかったけどたくさん書いて練習するよりも楽しくて覚えやすい。」また、漢字の学習を得意にしているD児も、「覚え歌は、楽しいし覚えやすくなる。でも覚え歌を作るのが難しい漢字もあった。」と回答していた。このことから、多くの児童にとって、覚え歌による漢字学習は、従来の漢字学習がつまらない、好きではないという意識から、楽しい、やってみたいという意欲の向上が推察される結果となった。

表5 児童の感想の分類

肯定的な感想	否定的な感想
<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字が覚えやすくなったし楽しかった。</li> <li>・覚え歌をみんなで作れておもしろかった。</li> <li>・またやりたい。</li> <li>・漢字を分解して覚え歌を作れることを初めて知っておもしろいと思った。</li> <li>・いろいろな漢字が出てきておもしろかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・むずかしかった。</li> <li>・ちょっとむずかしかった。</li> <li>・分からなかった。</li> <li>・むずかしいものもあった。</li> <li>・言い方がむずかしかった。</li> </ul>

## 6 成果と課題

### (1) 成果

通常学級において聴覚法の指導を取り入れた「漢字覚え歌」の指導を行うことで、3つの成果があったと考える。

1つ目は、「漢字覚え歌」による漢字練習を行うことで漢字書いて練習した時よりも漢字が定着しやすくなったことである。それぞれが自分に合った漢字覚え歌を作ることができた。このことにより、今まで漢字を苦手としていた児童も書ける漢字が増え、達成感を味わうことができ、漢字学習に対する自信につながったと考える。アンケートからは約6割の児童が覚え歌での学習方法で漢字は覚えやすくなったと回答している。これらのことから覚え歌を作って漢字の練習をすることにより漢字が覚えやすくなった児童が増えたと考えられる。通常学級においても聴覚法を援用した「漢字覚え歌」の漢字学習指導が有効に働く児童が存在することが明らかになった。

2つ目は、漢字の学習を楽しみながら学ぶことにより児童の学習意欲が高まったことである。従来のように一方的に教師が漢字の読みや書き順を教えてひたすら書くドリル学習とは違い、今回の実践は、自分たちで覚え方を考える主体性や考えた覚え歌を共有し合う対話的な面もあり、子どもたち同士で楽しみながら学習に取り組めた。このことがアンケートの肯定的評価につながったのだと考える。このことは、「漢字覚え歌」の漢字指導は、従来の漢字暗記学習から、主体的で対話的な深い学びにもつながる漢字学習の可能性を見つけ出したと考える。また、「もっとつくりたい」と言って様々な漢字で覚え歌を作ろうとする姿から漢字に対する関心を引くことができたと考える。

3つ目は、児童が新しい学習方法を知ることができたことである。本実践で児童たちは「漢字覚え歌」という新しい学習方法を知った。中には実際に学習してみて覚え歌を使った学習は覚えにくいと感じる児童もいた。しかし、そのような児童でも漢字を学習する方法は1つではないということに気付けたことは大きな成果であると考えられる。この先自分

の苦手なことにぶつかったとき、一つの方法にとらわれるのではなく、別の方法もあるかもしれないということを知っていることで自分にあった学習方法を試行錯誤し、より効率的に学習できるだろう。そのためにも、教師は、児童に様々な学習方法を紹介し、学習方法のレパートリーを増やしてあげることが大切であると考えます。

## (2) 課題

「漢字覚え歌」作りはとてつと時間が掛かることがあげられる。児童が覚え歌作りに慣れておらず、一つの覚え歌を作るのにも多くの時間が必要であり授業の時間を大幅に使ってしまった。継続して「漢字覚え歌」の学習していくことで、児童は学習方法に慣れ、時間短縮につながることを考えられる。授業時数の少ない高学年など授業内で毎回時間を取れない場合は、覚え歌作りに慣れてきたら自主学習などで考えてきた覚え歌をクラスで紹介し、共有して練習するなどの工夫をしていくことも必要になってくると考える。

また、アンケート結果から今までの学習方法より「漢字覚え歌」を使った学習の方が楽しいと答えた児童は約半数に留まった。その原因として、新しい学習方法に慣れていないことや、「漢字覚え歌」を自分で考えることに難しさを感じていた児童もいたことが考えられる。継続して「漢字覚え歌」の学習方法に慣れさせたり、自分で「漢字覚え歌」を考えるのが難しい子にはお手本を示したり、ペアで考えさせるなど段階を踏んで「漢字覚え歌」作りをすることで多くの児童が抵抗感を感じることなく活動に取り組めるのではないかと考える。

## 7 まとめ

本実践では、特別支援学級で行った聴覚法を援用した覚え歌を使った漢字の指導を改良して通常学級でも実践することで児童たちの意欲や漢字の正答率がどのように変化するのかについて検証してきた。今回の実践を通して通常学級に在籍する児童でも「漢字覚え歌」で漢字が覚えやすくなる児童が一定数いることが明らかになった。しかし、「漢字覚え歌」よりも今まで行ってきたドリル学習の方が覚えやすいと感じる児童もいることが明らかになった。つまり、それぞれが自分の力を最大限に伸ばせるように自分に合った学習方法を選択していくことが大切だと考える。この考え方は、文部科学省が述べている「一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高めるため、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである」という特別支援教育考え方と同じである。つまり、個人に合った学習方法を考えていくという特別支援の考え方を通常学級の国語の学習指導に取り入れることにより、分かりやすく楽しく国語の学習ができることを意味していると考えます。

特別支援学級、通常学級関係なく様々な特性のある児童が、国語の学習にとどまらず様々な学習の中で共に学んでいく中で自分にあった学習方法を試行錯誤し、自分で見つけ出していく力を育てることがインクルーシブ教育の推進にもつながるだろう。筆者は、児童が低学年のうちから楽しく漢字を学習し、高学年になっても漢字に対する抵抗感をもたずに学習できるようになり、児童それぞれに合う方法で学習をすることで漢字が大好きな児童が増えることを願っている。

## 8 引用・参考文献

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』2018年
- 2) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」2012年
- 3) 財団法人 総合初等教育研究所、「教育漢字の読み・書き習得に関する調査と研究」2003年
- 4) 春原則子・宇野彰・金子真人「発達性読み書き障害児における実験的漢字書字訓練－認知機能特性に基づいた訓練方法の効果－」、『音声言語医学46』2005年、10-15 pp
- 5) 大西愛「小学校高学年における効率的・効果的な漢字指導に関する考察」『教育実践研究 第30集』2020年
- 6) 栗林育雄「漢字学習の意欲を高める個に応じた指導の工夫」『教育実践研究 第27集』2009年
- 7) 大櫃達也・稲垣卓司「漢字書字障害のある生徒への支援方法の検討」、『教育臨床総合研究17』2018年、45-57 pp
- 8) 井上和紀・石田脩介・大庭重治「書字を苦手とする児童への支援方法について」『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要 第24巻』2018年、43-45 pp
- 9) 本実践の「漢字覚え歌」は、絵描き歌のように音楽にのせて覚えるものではなく、拍をとりながら唱えるものである。
- 10) ミッシングゲームとは、黒板に貼られたカードを1～2枚隠し、どのカードがなくなったかを当てるものである。